
日番谷隊長の乱心

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日番谷隊長の乱心

【Nコード】

N4189D

【作者名】

切香

【あらすじ】

遊子の受難^{ほんほん}、ジン太の受難（むりやり青春）、日番谷の受難^{ギャグ}の3話。各話はゆるく繋がってます。日番谷先遣隊が現世に来て、アラカルとやり合ってたころの設定。

Case 1 遊子の受難

「現在、空座町には、乾燥注意報が出ております。火元には十分気をつけ……」

俺を眠りから引き戻したのは、女の無機質な声だった。

乾燥……そんなアナウンス精霊廷にあっただろうか。初めて聞いた。

精霊廷では、ひどい火事の鎮火は俺の仕事だ。氷輪丸を一振りで大抵の火事はなんとかなる。

その後の氷輪丸の機嫌の悪さにはいつも参るが。

カチ、コチ……と規則正しく時を刻む時計の音。

それが部屋に響き渡るくらい、あたりは静まり返っていた。

蛇口から水が滴るシンク。カバーが取れかけた古ぼけた黒電話。

ポスターをはがした後がいくつも残る壁。

そして、誰も空間に内包しないそれらの空間が作り出す、どこか垢じみたような沈黙。

それははじめての空間でありながら、ずっと知っているみたいなかしさだ。

……はじめて？

そこで俺はやっと目を開けた。そしてがばっと布団から起き上がる。起き上がった右隣は窓になっていて、見ると遠くで電車が走っているのが見えた。

遠くが煙のようにかすんだ街並みが、ずっと広がっているのが見下ろせた。

「現世……」

つぶやいた俺の声は、われながら寝ぼけてた。そうだ。

俺は昨日、十刃と戦って・・・

「に、しても・・・」
なんだこの部屋は。

カーテンはピンク。意味を成さないほど透けたレースカーテンが、空間をますます異様に見せている。

しかも俺が寝ていたベッドは、シーツも布団も全てがピンク色で、ディフォルメしたキャラクターがあちこちに描いてある。

じゅうたんはベージュ。そしてベッドの逆の端には、机が置いてあった。

俺は何となく慌てて起き上がった。

あんなピンクのベッドにいつまでもいたら、妙な花みたいな香りが移ってしまいそうだ。

そのとき、布団の上から何かが滑り出た。

そいつを空中で受け止めてみると、それは一枚の紙。

繰り返すのもしつこいが、またも紙の色はピンク色だ。

その色に似合わない、これでもかというくらいヘタクソな字が書かれている。

ここで待ってる。

その紙に残されたかすかな霊圧から、その字の主が黒崎一護だと知る。

さぐってみれば、かすかに部屋の空気にも霊圧が解けている。

おそらく俺はあの戦いの後気を失い、そのままこの家まで運ばれてきたのだろう。

そして何かが起きて、他の奴は俺をここに寝かせたまま置いていった、と。

どうせ碌でもないことが起きているんだろうが・・・

に、しても。

「ここで待ってる」の字を再び眺める。そして周りの風景も。こんなところで待てるか！

つか、ワザとやって人を遊んでんのか。

俺はベッド脇に立てかけてあつた氷輪丸をひつ掴むと、早足でドアに向かった。

体のあちこちがギシギシと音を立てたが、こんな冗談みたいな部屋にいるところを、部下に見られるよりよっぽどマシだ。

バン、と遠慮も何もなくドアを開けた瞬間・・・俺は固まった。

ドアノブに外から触れた瞬間にドアが開かれたのだらう。

50センチほどの距離に人間の女が1人、呆然と言葉を失って立ち尽くしていた。

栗色の髪。丸い大きな瞳。身長は俺よりもちょっと高めだが、子供だ。

「・・・黒崎一護の妹か？」

びくつ、とその肩が動いた。

「お兄ちゃんの、お友達？」

おそろおそろ、目を丸くしたまま尋ねてくる。

どうも疑うということを知らない子供らしい。

決して同意したくない質問だが、ここは頷いておくほうが無難だらう。

俺はあいまいに頷き、手にした紙を少女の前に示した。

「こ・・・ここで待て。ヘタクソな字だね」

妹でもそう思うのか。

「・・・おにいちゃんがこの部屋で待つように言ったの？」

「つかわけだ。邪魔したな」

俺はそのまま、女の横をすり抜けて廊下へ出た。

とにかく、アイツらの後を追うことが先決だ。

アイツらがどうなっても知るかと一日千回くらいは思うが、これも仕事だからしょうがねえ。

頭は完全に外に向いてた・・・そのとき、俺は急に家の中に意識を引き戻された。

腕に感触を感じてわずかに振り返ると、俺の肘を女の小さい手が掴んで引き戻していた。

「ダメだよ」

俺が何か言う前に、女がやたらきつぱりと言った。

「君、あちこち怪我してるでしょ。歩き方でわかるもん。動いちゃだめ」

「別に歩けねえほどじゃねえよ」

普段と違う歩き方をしてたつもりはないが、こんな子供に気づかれるとはよっぽど俺もぼろっとしてるらしい。

俺がそういつても、女は手をはなさねえ。

「あんなあ・・・」

俺が肩越しに振り返って女を見たとき。俺の視線は一気に女を飛び越した。

「・・・なに？」

女がキョトンとして、後ろを振り返り・・・その全身が瞬時にこわばるのが手を伝って感じられた。

女のどこまでもピンク色の部屋の窓に、泥を煮たみてえなズタボロの着物をまとった虚が、べたりと張り付いていた。

その中身の無い瞳が、じっと俺たちを見つめている。

・・・にたり。

その顔に亀裂のような笑みが浮かんだ・・・と思った次の瞬間。

そいつは窓を何も無いかのようにすり抜け、俺たちに向かって音も

なく突進してきた。

ガッツ！

鈍い音と衝撃が俺の右腕に響いた。

俺がとつさに女の前へ出、柄ごと顔の前にかざした氷輪丸に、そいつの歯が食らいついていた。

俺のすぐ近くに女の顔があった。

恐れるところまで思い至っていない、放心した表情を俺に向けている。

・・・待てよ。

てことはこいつ、虚が見えるのか？

黒崎の妹なら、その程度のこととは当然かも知れねえが。

「・・・目え閉じてる」

俺は左腕を女の顔の前に持っていった。そして口の中で小さくつぶやく。

「縛道の二十の二・・・裏鏡門」

通常の鏡門と異なり、外からの攻撃は受け入れるが、内側から外に出ることが出来ない。『禁』に系統的に似た鬼道で、メジャーではないが敵を閉じ込めるのには重宝な術だ。

だが、こいつをこのままここに閉じ込めてもしょうがねえ。

俺は右手で『裏鏡門』の型を保ったまま、更に詠唱を重ねる。

「破道の三十三、蒼下墜」

その瞬間、結界内を青い炎がいつぱいに覆った。

そいつが逃げる時間どころか、悲鳴をあげる時間も残さなかった。

俺が結界を解いたとき、部屋の中にはかすかに黒い煙が流れるのみ。縛道系と破道系の鬼道を同時に使い、効率よく敵を殺す。

年次を重ねた年寄り連中がよく使う術だ。

でも俺は、子供の頃から割りとよくこの術を使っていた。燃費がい
いからな。

「・・・大丈夫か」

目隠しに持って言ってた腕をどけると、放心したままの女の顔が見
えた。

放心しながらも助かったことは理解できたのだろう、その全身から
力がふつと抜けた。

「・・・っおい？」

いきなりガツクリと後ろにのけぞったもんだから、俺は慌ててそい
つの肩を掴んだ。

顔をのぞきこむと、よっぱど怖かったのか気を失ってやがる。

「しょうがねえな」

くじやりと力を失ったそいつを担ぎ上げると、あの悪夢みたいな部
屋にもどり、布団にそいつを寝かしておいた。

ぴくりとも動かないそいつを見下ろしながら俺は考える。

自然と手を、そいつの顔の前にかざしていた。

死神の掟のひとつ。

死神はその姿や戦闘を人間に見られた場合・または不都合が生じた
ときは、その人間のその件に関する記憶は消滅させること。

・・・

まあ、俺の死覇装姿を見られたわけじゃねえしな。

記憶の消滅は、ごく稀に他の記憶障害も、引き起こすことがある。
俺はゆっくりと、そいつの顔の上にかざした、手のひらをどけた。
とても、さつき恐怖体験をした顔とも思えねえ、平和な顔でこいつ
は寝ている。

仮に怖い夢になって記憶が残ったところで、あの黒崎の一族だ。

うまくフォローしていくだろう。

「・・・鏡門」

両手の平を顔の前で内側に向け、小さく唱える。

手のひらの間に生まれた、かすかに白く光る正四面体が一瞬でふくらみ、この家を覆う。

裏鏡門と対を成すこの術は、裏とは逆に外からの攻撃は一切受け付けない。

これで、数日は虚から襲撃を受けても、中には入って来れないだろう。

さて、と。妙なことに時間を食っちゃった。

case 2 ジン太の受難

「・・・てめー、好きな奴とかもっいいんのかよ！バツカじゃねえの？」

そうは言ってみたが、こいつはまだでんでガキだ。まさか、んなことねーだろう。

だが。俺が全然考えてなかった顔を、遊子はしやがった。頬をピンク色に染めやがった！

こっそり読んだウルルの少女マンガに、そういうシーンがあったのを思い出した。

「どんな奴なんだよ」

モノのついでつて風に、うまく声は出したはずだ。

「んー、そうだねえ・・・」

遊子は瞳を宙に向ける。

「身長はあたしよりも低い。髪の毛は逆立ってて・・・声がすくく低くてかっこいいの！」

なに・・・！

俺は衝撃に身をのけぞらせた。

それって、俺じゃねえか！

まて、落ち着け。

俺はこれからとんでもなくモテるはずの男だ。

こんなのは序曲にしか過ぎない。こんなところで動揺してどうする！

やつはそのまま続けた。

「髪はね、銀色に光ってるの。」

目は青緑みたいな、透き通ったスゴクきれいな色。

あたしを助けてくれたの・・・そのときに近くに顔があって。

ホントかつこよかった・・・」

ちよっと待て。

「そ、そいつの、名前は・・・」

少なくとも俺は白髪じゃねえ！

俺はプルプルしながらやつとのことと言った。

まったく、だれだか知らねえが、いらねえことしやがって！ぶっ殺してやる。

「お兄ちゃんの友達みたいなの。『日番谷冬獅郎』って。名前までかつこいいでしょ」

ふーん。俺の名前は花刈ジン太だ。日番谷冬獅郎か・・・

花刈ジン太 < 日番谷冬獅郎 〓 名前のかつこよさ。

って・・・んなわけあるかあ！俺の名前のほうがよっほどいけてんだよ！

別に、遊子が誰をスキだろうと、知ったこっちゃねえ。

ねえがむかつくんだよ！

「ここで会ったが百年目！」

俺はそいつの前で仁王立ちになり、そう言い放った。

銀髪、青緑の目のガキ。間違いなえ。

こついうときはそういうので正しいんだよな。

あいては呆然としてやがる。そりゃ、俺が担いだ最強バットは只者じゃねえからな。

こんなのを軽々と担ぐ俺は、もっと只者じゃねえ。

「・・・何か用か」

それに対するそいつの返事は、それだけだった。

なんてつまらねえ返事だ。こいつはきつと頭が悪い。

「おい、何やってんだ!」
「やめたほうがいいっスよ」
外野がいろいろ言ってるが、この最強バットを担いだオレサマの半径3メートル以内は、いくら店長や黒崎だろうが入ってこれねえはずだ。

「がんばれ隊長!」
ん? 聞きなれねえ声はギヤルみてえな派手な女だ。
・・・隊長?

あだ名か。

「うるせえんだよ・・・」

茶化された日番谷はため息まじりに言った。

「かかってきやがれ、日番谷! 何なら俺が先に!」

あ。

言い終わるまでに殴りかかっちゃまった。

こういうのは初めっから自分が先に攻撃するつもりでも、一応最後まで言わなきゃいけないんだよな。

失敗した。

そう考えながら1メートルは俺は跳んだ。

そして最強バッドを大きく振りかぶる。

並みの死神じゃイチコロの、俺だけが扱える特製バッドだ。

それに対するあいつの反応は・・・

当たったか、と思った直前に、ふっと避けやがった。バッドが空を切る。

肩に刀を担いでくるくせに、刀を抜く暇もなかったか。

矢継ぎ早に次々とバッドで殴りかかるが、当たりそうであたらねえ。

「・・・つくそ!」

当たりそうってのが余計ハラが立つ。

「いい加減に……」

渾身の力を込めて振りかぶった時だった。
角をまがって現れた女の顔に、俺は上空で凍りつく。

遊子！

「……えっ……」

上空でバッドを思いつきり振りかざした俺に、その場で立ち止まる。

「ばっ、ばか、よける！」

叫んだが、ムダだと分かってた。俺の神速バッドを避けられるはず
ねえ。

そのとき。俺は目をつぶった。

が。バッドは振り下ろされなかった。途中で何かで止まったんだ。

「な……」

目を開けた俺の目に、遊子の姿は見えなかった。

しゃがみこんだ遊子の前に、日番谷が立ちはだかり、右手の甲で俺
のバッドを受け止めていた。

ピクリとしねえ……。

そう思った瞬間。俺の体がぐるりと宙を一回転した。

「うえっ！」

そのまま地面に頭から落ちる。

「ひ、日番谷くん……」

「また会ったな。なんで俺の名前知ってたんだ」

「お兄ちゃんに聞いたの。あたしはユズ」

ちよつと待て、この会話。

なんだ遊子のこのキラキラした顔。

あいつ、地面に転がった俺に見向きもしねえ。

いきなり殴りかかったのに傷つきもしてねえし、心配もしてね
え。

なんなんだよ。

俺は立ち上がり、

「あ……ジン太くん！」

慌てて袖を掴もうとした遊子の手を振り払ってダッシュした。

日番谷冬獅郎。俺に屈辱を与えた男。絶対にゆるさねえ、って思いながら。

case 3 日番谷の受難

やたら断固とした声で松本が言った。

「隊長、そこに直ってください」

「俺が何したってんだ？」

「居直ってくださいとは言ってますん」

俺は不承不承松本の前に胡坐をかいた。

俺の人生の中で、コイツに説教食らう場面だけはありえねえと思っ
てた。

「さて、問題です。隊長は何をしたでしょう」

「ガキのバットをかわして、最後に受け止めただけだろ。他に何か
したか？」

本気で思いつかねえ。松本はハラが立つほど長々とため息をついた。
「ユズっていう一護の妹を助けたでしょ」

「結果的にそうなっただけだろ。大体そのどこが悪いんだよ」

「ここがポイントなんですよ！妹が助けられてたとき、ジン太は地
面に伸びてた。

どれほどジン太のプライドが傷ついたか分かります？この状況」

「大げさだな。何が・・・」

はあっ！

松本がため息を通り越して声を出した。そして肩越しに黒崎を振り
返る。

「ダメだわ、この隊長、このテのことにはまるでボンクラ」

「誰がボンクラだ・・・」

「だから！ジン太はユズちゃんのことを好きなんです！

でもユズちゃんは隊長のことが好き・・・魔のトライアングルが形
成を」

「・・・乱菊さん。やめてくれよ」
黒崎が頭を抱えるのが見えた。

「・・・」

「ほら、ボンクラじゃないですか」

・・・を並べている俺にむかって、松本はダメ押しのようにボンクラボンクラ、はあゝため息でちゃう、とやりやがった。

この女・・・一回くらい畳んどくか。

「で。仮にそうだとして、なんでジン太ってガキが切れてるんだ？さっぱりわかんねえ」

俺の言葉に、今度は松本が頭を抱えた。

「何でわかんないかな・・・」

ジン太は、ユズちゃんの前でかつこいいとこ見せたかったのに、ライバル視してる隊長にあんなにかつこ悪い形で負けたんですよ？傷つかないわけ」

「ちょっと待て」

俺は松本の嘆きを途中で切った。

「俺は護廷十三隊の隊長だ」

「・・・はあ」

「百歩譲ってそんなのはどうでもいいとしても、俺は死神なわけだ。なんでこんな人間のガキと、関わらなきゃならねえんだ」

「いや、それは」

「寝る！」

俺は宣言して胡坐を崩した。
バカバカしい。

ごろりと畳に転がって、もう一度そう思った。

「いいツスよ、乱菊さん。まだ遊子にはそんなのはええよ」

黒崎がいいオニイチャンな顔して言ってる。

しかし、妹の年は気にしても、相手が死神だつて言うのはスルーか。
「ダメよ！」

それに対して、松本はやたら力をこめて言った。

「あたし・・・あたし、初恋、かなわなかったの。」

だから、やっぱりね・・・昔のあたしと同じくらいの年の子、見てたらほっとけなくて」

「・・・乱菊さん・・・」

黒崎、そんな唐突かつベタな嘘泣きにひっかかるんじゃない。流れるにオカシーだろ。

俺はそっぽを向いたまま言った。

「松本、懐からレンズでてんぞはっ！」

松本が懐に手をやって、

「なーんだ隊長、レンズなんて・・・」

言いかけて黙った。

俺と松本の目が合う。

「・・・松本」

「はい」

「こないだ出たボーナスで、お前でちたるかめら、とか買っただろ」

「発音が変わす、隊長」

「黙れ。そしてお前は、それで俺の写真集を、懲りずにまた作って売ろうとしてるだろう」

「すごい隊長、なんで分かるんですか？」

「やっぱりそうか！！！！」

俺は立ち上がり、ずかずかと松本の前まで歩み寄ると、松本の胸元に手をつっこんだ。

おお・・・

黒崎が声をもらす。

こいつの胸元はドラ もんのポケット並みに、いろんなものが突っ込めるらしいからな。

ずい、と俺はでぢたるかめらを引きずり出して、一瞬で氷漬けにする。

おお・・・

黒崎がもう一度声をもらす。

器の小っさい男だな。

「あ・・・あたしの・・・」

松本は身を震わせている。

「あたしのデジタルカメラ！よくも。よくも・・・」

無駄に霊圧があがる。こいつ、まさかとは思うが、まさか・・・

「唸れ、灰猫！」

やりやがった！

俺はすかさず腕を一振りした。その動作で水を呼び出す。

「あぁっ！灰が水浸しに・・・」

「無駄に始解するんじゃねえ！」

「もう隊長と一緒に戦えない！水浸しなんて・・・」

「相性わりい技だよな、お互い」

なんの悪意もあるのかねえのか、黒崎の一言が俺達のやり取りにトドメを差した。

そのとき、バタバタ・・・とすげえ音で廊下を走ってくる音がした。バツシーン！！

障子が押し開けられたそこには、あのジン太とかいうガキが立っていた。

目を血走らせ、額には青筋立ってるが泣いてるようにも見える。怒るか泣くかどっちかにしろ。

そいつは、俺のところにはズカズカとやってきた。
そして、俺をビシ！と指差した。

「一億歩譲って！お前を俺のライバルと認めてやる！」
へっ？

イラネーとか。何がどうなってそうなるんだとか。

俺が適当な言葉をひねり出す前に、そいつは続けた。

「確かにお前は俺よりちよつとばかり強いかもしれねえ。

身長もたけえしな。でも・・・ぜつたい、俺のほうが・・・キン
マはでけえ！！」

「・・・は」

「キン マのでかさが男としてのどつかさだって、店長が・・・う
おおっ？」

「た、隊長！卍解はダメです！一護とめてー！」

「ご乱心！ご乱心！」

一日後。

「・・・日番谷隊長。そこに直りなさい」

「・・・はい」

俺は、現世の浦原商店を全壊した上、氷漬けにした罪状で、総隊長
に呼び出されていた。

「で、一体なぜじゃの」

俺は石のように沈黙を守った。それ以外の何ができるってんだ。

「どんな理由があるうが、感情のままの暴拳など、小物のようにな
とをしないで」

小物。

それはどんな言葉より、俺を脱力させた。

「・・・申し訳ありません」

「うむ。罰として」

そらきた。虚の群れに放り込まれようが、流魂街の荒地に派遣されようがまあ平気だ。

俺がこの件を頭から消し去ろうとした時。

「浦原商店を修理してきなさい」

「そ・・・」

それだけは勘弁してください、とか、そんなアホな、とか。

およそ死神らしくねえ言葉を、俺は喉の奥で飲み込んだ。

俺の受難は、まだまだ終わりそうにない。というか、始まりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4189d/>

日番谷隊長の乱心

2010年10月9日19時04分発行